

監訳者あとがき

本書は、『中国針灸学術史大綱』日本語版用として黄龍祥氏より提供された中国語原稿データを、①日本語に翻訳し、②引用された古典文を原本で確認し、中国簡体字を旧字体（「いわゆる康熙字典体」*¹）あるいは日本の常用漢字に変換したり、通仮字・古今字・異体字をもとの字に戻したりした後に、訓読（または口語訳）し、③補足説明が必要な箇所に注釈を施したものである。また、翻訳者がどのように読んだかという説明も含まれている。従って、単なる翻訳ではなく、『中国針灸学術史大綱 校注・語訳・^{さつき}劄記』とすることができる。

黄龍祥氏は中国中医科学院首席研究員で、著者紹介にあるように多くの著作や論文がある。主な研究領域は、鍼灸文献研究（1983-1993年ごろ）、鍼灸学術史研究（1993-2003年ごろ）、鍼灸理論研究（2003年ごろ以降）であり、これ以外に中国国家標準「経穴部位」「腧穴名称与定位」、WHO/WPRO「標準経穴部位」の制定や鍼灸学の国際教材*²の制作などにも携わっている。

日本内経医学会と黄氏との関わりについては、日本語版『中国鍼灸史図鑑』（2014年）の翻訳あとがきに詳しいためそちらに譲るが、その後も2016年の研究発表会や新年会に参加していただき、最近では2025年3月に行われた「シンポジウム『銅人形再考』」（北里大学薬学部附属東洋医学総合研究所、日本伝統医学総合研究所と共催）で、オンライン講演をしていただいた。

『中国針灸学術史大綱』（簡体字版・華夏出版社）は2001年に出版され、2002年に増修版（繁体字版・知音出版社）が出版された。

黄氏が後記を書いた日からすでに四半世紀が経過した。その間にいくつかの発見もあり、当然黄氏の考えにも修正・進化が生じている。25年前の著作の翻訳をいまさら出版することに意義があるのか、という意見があるかもしれない。それに対しては、山東中医薬大学・張樹劍教授『中国針灸思想史論』（2020年）*³の後記の一部を紹介したい。

『中国針灸学術史大綱』はすでに経典になっており、現在では鍼灸文献・学術史の研究は多かれ少なかれこの本の影響を受けている。……黄先生の『中国針灸学術史大綱』は、50年後に振り返ったとき相変わらず価値があるに違いない。

本書の翻訳作業は、第二部は日本内経医学会が担当し、2017年1月にスタートした。第一・三・四・五部は岡田が担当し、2019年6月にスタートした。最終的には、語調や形式を合わせるために、全体の監修を岡田が2024年4月より行った。

具体的な翻訳者・協力者名は次のとおりである。(五十音順に表記)

〔第一・三・四・五部〕

岡田隆 〈協力〉荒川緑, 土山絵里佳

〔第二部〕日本内経医学会『中国針灸学術史大綱 経絡部』翻訳グループ

〔天野陽介, 岡田隆, 加畑聡子, 嵯峨野智夏, 左合昌美, 土山絵里佳, 宮川浩也,
米谷和輝〕

〈協力〉荒川緑, 久保千枝子, 小林健二, 小宮山乃輔, 下山ユカリ, 中野紀子,
林孝信

翻訳にあたっては、できるだけ原著に忠実に翻訳したいという気持ちと、日本の読者に分かりやすいようにという気持ちとの間で常に葛藤があった。また、『大綱』原著の間違いないのか、翻訳者の理解不足なのか判断に迷うことも多かった。また、たとえば原著には“「是動」病”, “「是動病」”, “是動病”という表記の違いがあるが、単なる不統一なのかあるいは著者が意図的に区別しているのか, “脈診”と“診脈”は異なるのか, など大いに悩んだが多くは未解決のままである。

本書24頁に「あらゆることと同様に、医学古典籍の整理を行うことにも功績と過ちの二面性があるが、……もし我々の仕事の功績と過ちが同程度なら、我々の仕事はその意義を失い、もし過ちが功績を上回るなら、我々は罪を犯していることと異ならない。我々のこれまでの仕事は結局のところ、功績が上回っているのか、功績と過ちは同程度なのか、あるいは過ちが上回っているのか。歴史が公正な評価を下すはずである」とあるが、中国語の学術書（特に古代漢語で書かれた古典文を多く含む場合）の日本語訳を行うことにも功績と過ちの二面性がある。今回の校注・語訳の功績が過ちを上回っていることを願いたい。

2026年2月

岡田 隆

*1 康熙字典を典拠として作られてきた明治以来の活字字体のこと。(文化庁「表外漢字字体表」前文より)

*2 劉保延, 黄龍祥主編『(世界針灸聯合会推薦図書) 国際針灸学』求真出版社, 2024

*3 張樹劍著『中国針灸思想史論』社会科学文献出版社, 2020